

グローバル社会における現代日本の建築家の設計姿勢

— 海外建築作品の設計論を題材として —

Design Attitude of Contemporary Japanese Architects in Global Society

- A Study on Design Theories of Overseas Architecture by Japanese Architects -

奥山研究室 09M30345 丸子 勇人 (MARUKO, Yuto)

Keywords：グローバリゼーション、現代日本の建築家、設計姿勢、地域性
globalization, contemporary japanese architects, design attitude, locality

1. 序

経済や情報のグローバル化が進む現代社会において、日本の建築家が海外で設計を行う事例が近年増えている。その際、建築家は自国と異なる環境において、現地の伝統や風土などの様々な社会的コンテキストについて日本と比較することで自身の設計コンセプトを構築していると考えられる。このような場所のコンテキストと関連した建築家の思考には、国内において地域性をもとに建築を構想する際の思考を敷衍しながらも、日本のナショナルリティへの意識が介在することで、グローバルとローカルの双方の射程を併せ持つ設計姿勢が読み取れる。そこで本研究では、現代日本の建築家による海外建築作品の設計論を題材とし、現地国に関する設計根拠、現地国に対する評価、日本参照の立場、反映手法について検討することで、グローバル社会における建築家の設計姿勢の一端を明らかにすることを目的とする。

まず、現代日本の建築家による海外建築作品¹⁾の設計論において(図1)、設計の根拠を現地国の特有の内容とするもの(「現地国²⁾」)と、国や地域に関わらず、一般的な敷地周辺の内容とするもの(「敷地周辺のみ」)の大きく2つに整理し、これらを参照エリアとして位置づけた(図2)。ここで、参照エリア別に作品数の通時的推移を検討したところ(図3)、1985年を境に作品数の急激な増加がみられた。また、現地国の内訳について欧米とアジアを比較すると、総じてアジアでは参照エリアが「現地国」のものが多くみられた。本研究では、参照エリアが「現地国」である112作品を資料対象とする。

2. 海外建築作品における現地国に関する設計根拠

2-1. 現地国に関する設計根拠 資料より、建築家が設計に際し、現地国のどのような事柄に着目したかについて明確に著された箇所を設計根拠として抽出し³⁾、それらをKJ法⁴⁾を用いて比較検討した。その結果、それらは【空間・形態的根拠】【技

no.72 建外 SOHO / 山本理顕 (新建築 2004年7月号) 所在地: 中国/アジア 参照エリア: 現地国 + 日本	
<p>次々に新しい建築が周辺環境とはまったく無関係に実現するのである。…でも、ひとつの地域そのものを設計するようなプロジェクトで…単にその建築だけが周辺から際立っていいというわけではないと思う。…ここに住む人たちの生活をできるだけ具体的にイメージできるようにすること。…SOHOのような住み方である。…住宅を開くといっても、日本では制度的にかなり難しいことがわかってきた。日本で SOHO ができないのだったら、むしろ北京でそれを徹底してできないかと思ったのである。…できるだけ外に対して開いた、オフィスにも住宅にもなるような自由なユニットをつくらうと思った。</p>	<p>設計根拠 72-1 2-1. 中国では新しい建築が周辺環境とは無関係に実現する ⇒〈環境的根拠〉</p> <p>2-2. 現地国に対する評価: 現地批評 日本参照の立場: 参照なし 現地 単純批評型</p> <p>3-1. 反映手法: 記述なし</p> <p>設計根拠 72-2 2-1. 住宅を開くことが難しい日本の制度に対し北京で挑戦 ⇒〈慣習的根拠〉</p> <p>2-2. 現地国に対する評価: 現地尊重 日本参照の立場: 日本批評 現地尊重 / 日本批評型</p> <p>3-1. 反映手法: 〈内部〉</p>

図1 分析例

〔現地国〕 112	現地国の特有の問題を根拠としているもの
〈日本参照あり〉69	・スイスのような国では、建築と社会の関係が当たり前に市民や建築家から強く信じられているのに対し…日本では建築と社会の信頼関係を十分に培っていない…no.94
〈日本参照なし〉43	・外部仕上げや工法もすべてオーストラリアの伝統的農場をつくってきたものばかりだ。no.38 ・高温多湿気候の東南アジアで、居住空間モデルの単位を組み立てられるか。no.44
〔敷地周辺のみ〕 98	一般的な敷地周辺の読み取りと変わらないもの
	・ツォルフラインには、炭坑のためにつくられた巨大な建物が並んでおり、それらは非常に印象的な風景を生みだしている。

図2 参照エリア

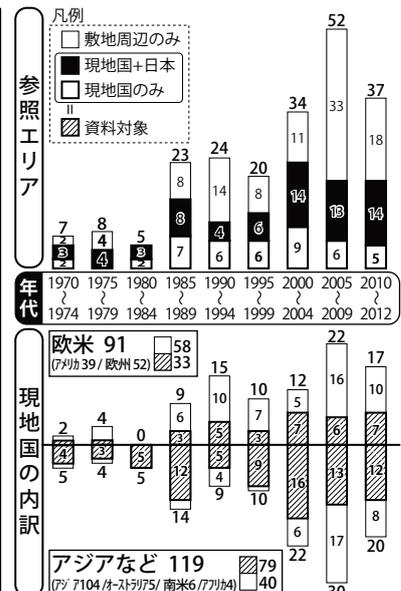


図3 参照エリア/現地国の内訳別 作品数の推移

術的根拠】【環境的根拠】【慣習的根拠】(以下、【空間・形態】【技術】【環境】【慣習】)の4つの枠組みから捉えることができた(図4)。「空間・形態」は、伝統的な建築にみられる屋根形状や室の配列などの形態・構成的特徴に着目した「建築的形態」や、現地の建築にみられる重量感や力強さなどの建築の性質に着目した「空間的性質」といった、現地国の建築に関する形態の特徴や空間の性質を根拠としているものである。「技術」は、よく使われるレンガ材などの建築材料や構法の特徴に着目した「材料・構法」や、職人の技量などに基づく建築の施工に関わる技術や精度に着目した「施工技術」といった、現地国において建築を構築する上での技術的な内容を根拠としているものである。「環境」は、都市景観やそれが現象する様に着目した「都市環境」や、雨や風、気温などの気候風土に着目した「自然環境」といった、建築周縁を取り巻く環境に関わる内容を根拠としているものである。「慣習」は、ライフスタイルや国民性など現地国の人々の行動や性格に着目した「慣行・気質」や、建築家の社会的地位などの建築と社会の関係性に着目した「建築の社会的価値」や、法律や経済状態などの現地国の社会的基盤に着目した「社会的制度」といった、現地社会に通底する慣習的な内容を根拠としているものである。

2-2. 現地国に対する評価と日本参照の立場 資料とした設計論からは現地国に関する設計根拠に加え、その内容が現地国に対して肯定的に語られるか、批判的に語られるかといった評価を読み取ることができる。また資料の中には、現地国を評価する際に、日本を参照することで現地国を相対的に位置づけようとするものがみられた。そこでまず、このような現地国に対する評価を現地尊重、現地批評として整理し(図5)、その際

日本を参照するものについては、参照の立場から**日本尊重**、**日本批評**を位置づけた(図6)。ここで設計根拠の内容と参照の立場の関係を検討したところ、「空間・形態」【技術】では日本尊重が多く、「慣習」では日本批評が多くみられた。

2-3. 海外における建築家の参照態度と根拠 前節で捉えた現地国に対する評価と日本参照の立場の対応から、海外での建築設計における建築家の**参照態度**を位置づけ、それぞれの設計姿勢の内訳に設計根拠の内容の分布について示したものが図7である。まず、大きく設計姿勢を比較すると、**日本尊重**では現地批評が多く、**日本批評**では現地尊重が多くみられた。このことは、建築家は海外で設計する際に、現地国と自国との相違点を認識することで自身の創作の立脚点を見出す傾向にあることを示すものと考えられる。

次に、それぞれの参照立場ごとに設計根拠の内容を検討する。まず**日本参照なし**について比較すると、現地単純尊重型(E)では4つすべて設計根拠の内容が同程度みられた。それに対し、現地単純批評型(F)では【環境】【慣習】が多くみられた。このことは、建築家は現地における環境や慣習的な事柄の問題点を根拠とする傾向にあることを示している。つぎに**日本参照あり**について、現地批評/日本尊重型(B)や現地尊重/日本批評型(C)のように現地国と日本を対立的に捉える姿勢に着目すると、前者では【技術】が多く、後者では【慣習】が多くみられた。このような姿勢において建築家は、海外で建築を構想する際に、自国のアイデンティティを強く意識していると考えられ、これを踏まえると、建築家は日本の社会的性質を強く帯びている自国の事柄を非難する一方で、技術的側面に日本独自の価値を見出す傾向にあると考えられる。また、現地国と日本

【空間・形態的根拠】 46 現地国の建築に関する空間的な特徴や性質	建築的形態 36	CP、SATの構造はマレーシアの伝統的な住宅の様式である、カンポン・スタイルの屋根が抽象的に引用されており…_no.48-4 アラビアの伝統であるパティオを取り囲んで壁面線まで広げ…no.17-1 フィリピンでは…圧倒的な量感と重量感を強調する建物が多い…no.34-1
	空間的性質 10	イスラムを、内側に小さなパティオが多数ある都市空間の部分のような多中心的な建築として解釈し…no.70-1
【技術的根拠】 49 現地国において建築を構築する上での技術的な内容	材料・構法 27	現地で多く見られる色塗、寸法のバラツキ具合をそのまま残すように生産した瓦を、敢えて使用することにしました。_no.111-2 中国独自の材料を使いたいと考え…no.59-2
	施工技術 22	ベトナムの流儀にならない、最小限の柱・梁・床をRC躯体として壁は現地産のレンガ積みとする工法を選択した…no.41-1 ここでの技術は、ほぼ3つしかない「積む」「塗る」「結ぶ」である。_no.91-2
【環境的根拠】 47 現地国において建築周縁を取り巻く環境的な内容	都市環境 20	ひとつの高層街区が一瞬のうちにキノコの如く立ち上がるさまは、たとえば中国では今やありふれた都市の現象となっている。_no.64 アジアの街を歩いていると、広告物もつ圧迫的な存在に驚かされる。_no.73
	自然環境 27	強烈な日射、高温多湿のシンガポールの風土より完全に保護された空間でなく、自然な風土を感じ楽しめる空間を生み出す…no.44-2 最高気温45℃となり、いつもパウダーストのまうこの国…no.17-2
【慣習的根拠】 66 現地の社会に通底した慣習的な内容	慣行・気質 23	派手で目立つ建築を好む一方で、洗練された詳細や高品質な仕上げといったことにはあまり関心を示さない国民性がある。_no.57-2
	建築の社会的価値 13	シンガポールは人口250万人の小さな国ですから、相対的に建築家の数は多くありませんが、建築家の地位は社会的に定着しています。_no.20-2
	社会的制度 30	アメリカの建築界では、マニファクチャーの不在と極端な訴訟社会になったため、新しい物の開発…ができなくなっている。_no.107

図4 現地国に関する設計根拠

現地尊重	現地批評
設計根拠に対し肯定的・尊重 134	設計根拠に対し否定的・批評 74
【空間・形態】 37	9
【技術】 30	19
【環境】 25	22
【慣習】 42	24
ex) 建物のスケールはどこまでもこの国の住宅のスケールを繰り返し積み上げて構成してある…_no.25-2 ⇒ 現地尊重	ex) 例Aでも最も厳しと言われる例Bの歴史建造物保存に関わる厳しい法律をいかにクリアするか…_no.92-1 ⇒ 現地批評

図5 現地国に対する評価

日本参照あり 87		日本参照なし
日本尊重 49	日本批評 38	
【空間・形態】 16	4	【空間・形態】 26 【技術】 28 【環境】 34 【慣習】 33
【技術】 17	4	
【環境】 5	8	
【慣習】 11	22	
ex) 日本建築がかつて有していた“縁側”の考え方を現地の伝統的の家屋構造に見出した…_no.19-1 ⇒ 日本尊重	ex) 住宅を開くことについても、日本では制度的にかなり難しい…_no.72 ⇒ 日本批評	121

図6 日本参照の立場

の双方を尊重する双方尊重型 (A) では、【空間・形態】が多くみられ、このことは、異なる文化的背景の中での設計において、建築そのものについては共通性を見いだす傾向にあることを示すものと考えられる。

3. 現地国に関する設計根拠の反映手法

つぎに、前章までに整理した設計根拠をどのように実際の設計に反映しようとしたかについて明確に著された箇所を反映手法として抽出し、その内容を分類・整理したところ、反映手法は建物の外部を操作する《外部》と、建物の内部空間を操作する《内部》、建物全体の架構やディテールを操作する《架構》から捉えることができた (図8)。特に《外部》については、広場や外構といった外部空間に関する {配置}、屋根やヴォリュームといった建物の外形輪郭に関する {かたち}、外装や開口といった建物の表層に関する {表層} に分類することができた。ここで反映手法と前章で位置づけた日本参照の有無の関係を比較したところ (図9)、その結果、日本参照がある場合、《外部 {配置}》と《架構》が比較的多くみられ、さらに日本参照の立場に着目したところ、偏りはみられなかった。このことは、建築家が日本と相対化する思考から建築の表現を試みる際には、参照の立場に関わらず、外部空間のつくり方や建物全体における架構やディテールに日本のアイデンティティを意識化する傾向にあることを示すものと考えられる。

4. グローバル社会における建築家の設計姿勢の通時的傾向

ここでは、これまでに位置づけた設計根拠の内容、参照態度、反映手法を通時的⁵⁾に比較することで、グローバル社会における現代日本の建築家の設計姿勢を検討する (図10)。まず、70年代から80年代前半にかけて、設計根拠では【環境】が多く、参照態度では、日本と現地国を対立的に認識しているものが約半数みられた。このことは、海外での建築設計が一般的ではなかったことから、都市景観や気候風土といった日本と現地国の差異を認識しやすい物的な環境に対し創作の根拠を見出す傾向にあったことを示すものと考えられる (i)。バブル景気やベルリンの壁の崩壊などグローバル化を推進させる社会変革がみられた80年代後半から90年代前半にかけては、設計根拠では【空間・形態】が多く、参照態度では現地尊重が増加傾向にある。特に90年代前半においては現地尊重が大半を占め、日本を尊重するものも比較的多くみられた。このことは、例えば磯崎新が現地にみられる建築の形式に対し日本の建築的要素を投影しているように、グローバル化が進む社会を引き受け、現地国の状況を尊重しながら新しい建築を構想するといった建築家の社会状況に対する意識の高さを示しているものと考えられる (iii)。特に現地国の建築の形や空間の性質に価値を見出している (iii)。2000年以降から近年にかけては、設計根拠では【慣習】が多く、参照態度では日本批評が多くみられ、例えば

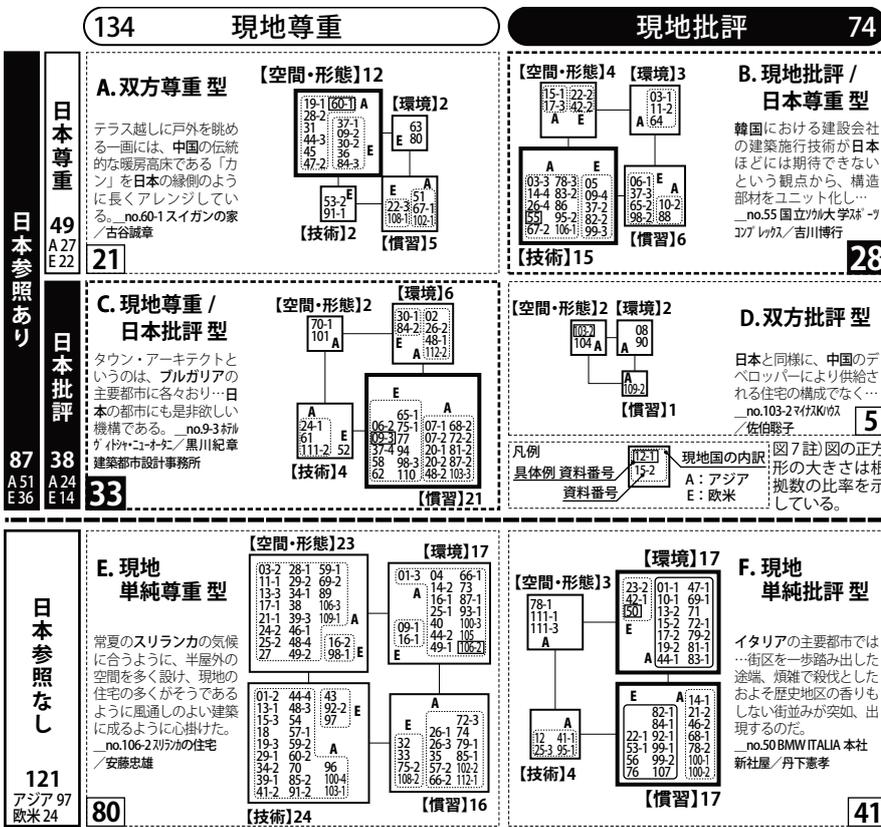


図7 海外における建築家の参照態度と根拠

《外部》	《内部》			《架構》
	配置	かたち	表層	
19	16	21	42	33
35	3	14	5	19
47	21	5	21	14
61	40	21	14	19

図8 反映手法の内容

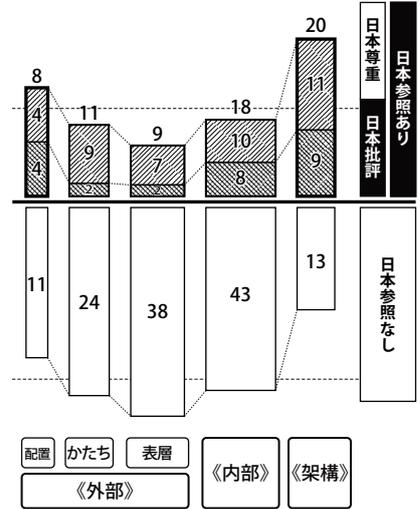


図9 反映手法と日本参照の立場の関係

坂茂はフランスにおける建築家の社会的地位の高さを羨望し、日本を非難している (vi)。このような近年に特徴的な設計姿勢は、社会のグローバル化による従来の価値体系の崩壊、また日本社会の成熟に起因していると考えられ、グローバル社会に反して、自国のアイデンティティを見つめ直す日本の建築家の姿勢を示していると考えられる。

次に現地国の内訳別に設計根拠を通時的に比較検討した。その結果、設計根拠に関しては、欧米では基本的に【慣習】が多くみられたのに対し、アジアにおいては設計根拠の内容に通時的な変化がみられた。このことは、欧米において日本人が「ある種の文化的劣等感」⁶⁾を抱えていることから、建築家もまた常に社会的性格をもつ事柄に対し意識的になることを示していると考えられ、その一方でアジアにおいては、建築家が様々な事柄を柔軟に創作の根拠として捉えており、グローバル化した社会に対するこれからの建築の在り方を捉え得る可能性がアジアにおける設計行為に見出すことができる。

5. 結

以上、海外建築作品の設計論において現地国に関する設計根

拠とその評価、日本参照の立場、反映手法について検討した。その結果、設計根拠は4つの大枠で整理できた。さらに現地国の評価と日本参照の立場の関係から、現地国と日本を対立的に認識することで創作の立脚点を見出す傾向にあること、特に日本の技術的側面に価値をおき、日本の社会的性質の事柄を批判するといった、グローバル社会の中におけるローカリティへの志向性を見出した。また、通時的傾向から、近年の動向として、社会のグローバル化と日本社会の成熟により、自国のアイデンティティへの意識が高まる傾向にあることを見出した。

- 註1) ここでは建築専門誌のなかで最も代表的と思われる「新建築」に掲載された作品を資料対象とし、「GA JAPAN」に掲載された作品も少数だが補足的に扱っている。また、グローバルイゼーションという言葉が登場した1970年代から2012年までを資料対象期間としている。ただし、実現した建築に比べ社会性が劣るとされる計画案、万博博覧会における建築のように国家を前提とした祝祭性をもつ建築作品は資料対象外としている。
- 2) ここでは現地国よりも広域なエリア (cf. アジア、西欧) を参照する場合においても、分析対象として扱っている。
- 3) 現地国に関する設計根拠は112資料より208根拠抽出することができた。
- 4) 川喜多二郎：発想法、中央公論社、1967
- 5) 通時的傾向の時代区分は、資料とした海外建築作品が1985年以降に急激に増加したことを踏まえ、その数的バランスから、1970～1984年をひとつの時代区分とし、それ以降を5年ごとに設定した。
- 6) 梅棹忠夫：文明の生態史観、中公文庫、1974

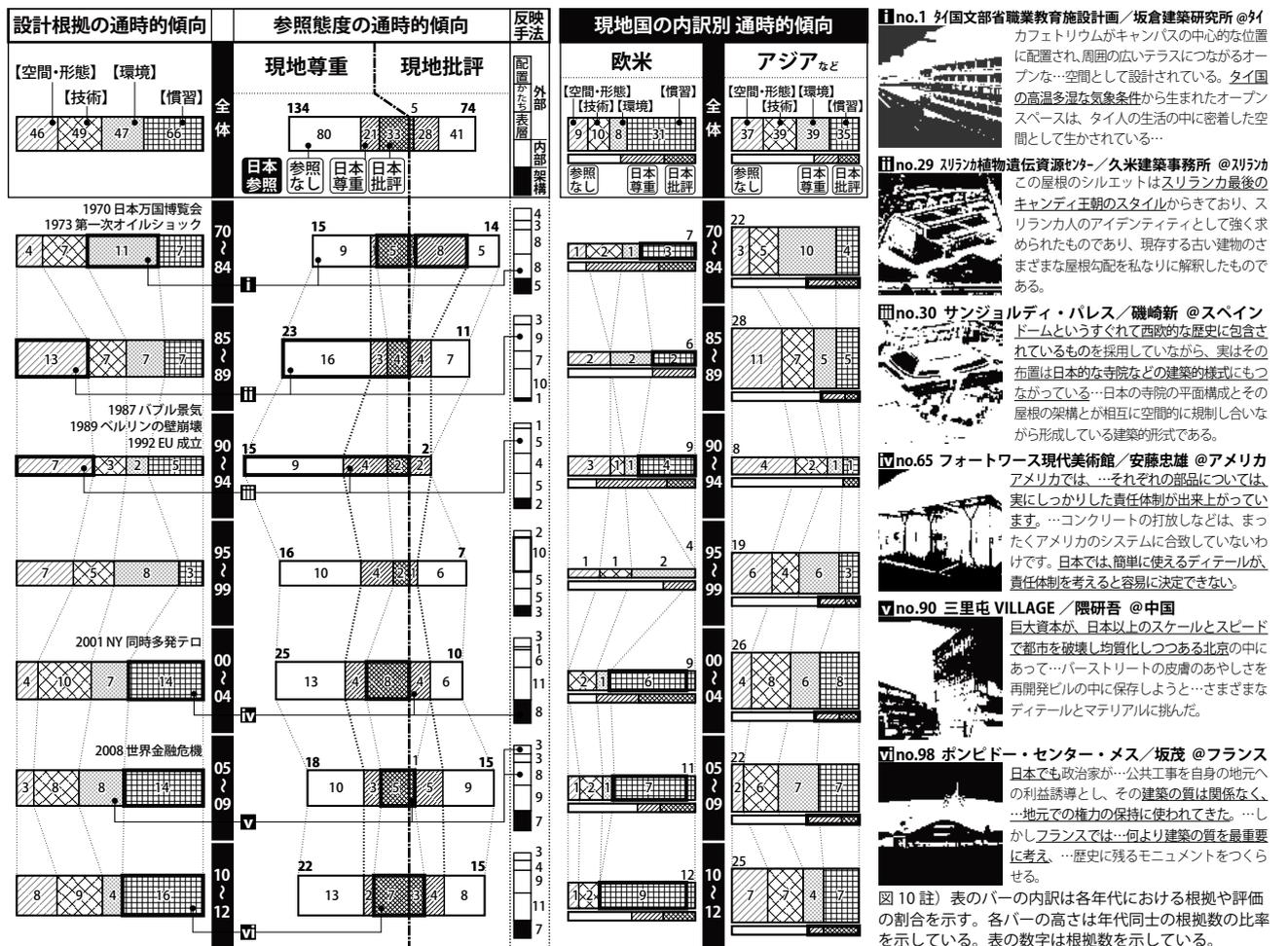


図10 グローバル社会における建築家の設計姿勢の通時的傾向

- no.1** タイ国文部省職業教育施設計画/坂倉建築研究所 @タイ
カフェトリウムがキャンパスの中心的な位置に配置され、周囲の広いテラスにつながるオープンな空間として設計されている。タイ国の高温多湿な気象条件から生まれたオープンスペースは、タイ人の生活の中に密着した空間として生かされている…
- no.29** スリランカ植物遺伝資源センター/久米建築事務所 @スリランカ
この屋根のシルエットはスリランカ最後のキャンディ王朝のスタイルからきており、スリランカ人のアイデンティティとして強く求められたものであり、現存する古い建物のさまざまな屋根勾配を私なりに解釈したものである。
- no.30** サンジオリディ・パレス/磯崎新 @スペイン
ドームというすぐれた西歐的な歴史に包含されているものを採用してはいるが、実はその布置は日本の寺院などの建築的様式にもつながっている…日本の寺院の平面構成とその屋根の架構とが相互に空間的に規制し合っているから形成している建築的形態である。
- no.65** フォートワース現代美術館/安藤忠雄 @アメリカ
アメリカでは、…それぞれの部品については、実にしっかりした責任体制が出来上がっています。…コンクリートの打放しなどは、まったくアメリカのシステムに合致していないわけですが、日本では、簡単に使えるディテールが責任体制を考えると容易に決定できない。
- no.90** 三里屯 VILLAGE/隈研吾 @中国
巨大資本が、日本以上のスケールとスピードで都市を破壊し均質化しつつある北京の中にあって…バーストリートの皮膚のあやしさを再開発ビルの中に保存しよう…さまざまなディテールとマテリアルに挑んだ。
- no.98** ポンピドー・センター・メス/坂茂 @フランス
日本でも政治家が…公共工事を自身の地元への利益誘導とし、その建築の質は関係なく、…地元での権力の保持に使われてきた。…しかしフランスでは…何より建築の質を最重要に考え、…歴史に残るモニュメントをつくらせる。

図10 註) 表のバーの内訳は各年代における根拠や評価の割合を示す。各バーの高さは年代同士の根拠数の比率を示している。表の数字は根拠数を示している。